

★講演★

内なる自然との調和

清水 美智子

へ進歩とは何か

私というのは、いつも頭の中でもややもやしていて少しもさえないというのがいつもの状態で、右かと思えば左のことを考え、プランを考えれば必ずマイナスのことを考えるというぐあいで、いつも揺れ動いています。私が毎日の生活の中から考えてわからないなあと思いがちながらも考えつつづけていることをお話しさせていただきたいと思います。

私が大学を出ましたのが一九五七年ですけれども、大学院を出て保育科に就職いたしましたして幼稚園関係の職場にいろいろ接触を

もつようになりましたのが一九六二年。ふと気がついてみると自分の生活が変わっていた。生活のテンポも非常に大きく変わっていたというのがその頃から十年位の間に感じたことです。私が幼児の世界にふれながら、生活のいろいろなことにたずさわりながらきたその間、宇宙衛星が打ち上げられたり、大きな技術革新という幕が開けられたわけです。一九七二年の「保育学年報」には村山貞雄先生でしたか、「知識爆発時代」と、進歩に疑問をもつように思う、とかいていらっしやいましたが、人類がとて進歩をとってきたという風な見方が六十年代に出てきた時だったのです。

その頃私は京都で暮らしておりまして、今は二年程前から奈良にいますけれど、どちらかというに変化のテンポが遅い、それが風土と関係あるかもしれませんけれど、ゆっくりとしたテンポで

しか、なかなか動けない人間だったものですから、気がついたら自分の不適應感というのを感じまして大変悩んだ時がありました。そんなことから自分で非常に変化が激しいという現実の社会の動き、これを進歩と考えたら、私は非常に社会に不適應で落伍してしまふ感じで、進歩ってなんだらうというのがその頃から出てきた疑問だったのです。

丁度、幼児教育の分野をみせていただきながら歩いてしていると、「時代に遅れないように、進歩した時代に適應できるようにな子どもに」という教育内容の改革が、幼児教育の關係でも言われて、最近の新しい成果をどんどん取り入れたというものがでてきたわけです。その中で、何が進歩なのかを考えたいという気持ちですが、ずっと続いていまして、その時に自分の激しい変化に不適應をおこして落伍しそうな状態を支えたのは、古いものにふれたり、自然の中に身をおくことだったのです。そうしていると戻ってくるものがあるものですから、よくそういう所を訪ねたわけです。

〈変わらないもの〉

私の住んでいる所からわりに近いのですけれども、ご存じの唐招提寺——私はとても好きなんですけれど——あの大きな本堂の

いらかの前に立っていると、自然に感動で胸がいっぱいになるわけなんです。この美しさ、このおおらかさ、まるやかさみたいなものが、私が今こういうふうに感じるものが、ずっと以前千二百年位前にこれをつくった人たち、これを建立した人たちも、やはりこの美しさというものを感動の心でつくりあげたのではないだらうかと思うし、奈良などですと、仏さまの前にほんの近い距離に立つと自分というものがほんとうに小さいと感じる。今まで忘れていた失いかけているようなもの、自分がなんとちっぽけな存在なのかということを中心に感じさせられる。あまり人の行かない時期に訪ねてすわっていると、昔の人がなぜこの仏像をつくられたんだらうかなどと考えて、その美しさに打たれながら人間の小ささみたいなものを感じていると、人間の歴史というものが千年、千二百年とたっているわけですけれども、そういう感動とか敬虔な気持ちになるとか、思わず頭が下がるとかいう感情、情緒というものは、昔も今も変わらないです。ずっと続いて人間の中に脈打っているものであり、それは一方、高ぶりがちな心との対比で、昔の人もそういうものを求めたのではないかなと思えてくるのです。変化のめまぐるしい中で今もって、変わらないものを一つつかめたような気がして、とてもしんどい時は、そういう時間を多くするようにあちこち調整しているわけです。

変化の激しい時代、技術革新の時代、あるいは知識爆発時代といわれたりしてなにかもがかわって行くようにみえている。生活のようすが変わって行く中で、何も変わらないものがあるとしたら、それにもし私がゆきあたったなら、それはとても大事なものののではないか。私は、少なくとも個人的な経験としては、とてもうれしい出会いをしたと思っています。学生時代から好きではあったけれども、こんな風な思いにかられたことはそんなになかったと思うと、なぜひかれたかということも、自分がこういう状態だった時にはじめてわかったように思うのです。

そういう変化しないものとは、仏像とかお寺とか千何年前の古い建築とかいうものに、昔の人の心を感じとりながらというだけだしに、たとえば夜の空ですけど、京都でも私は南の方に住んでいたからわりと町の灯から遠かったんですけども、今は奈良に移ってもっとまわりが暗いんですね。いなかの方に移りました夜の空は、こんなにきれいなかと夜の空の美しさというのをはじめて私は感じまして、そのたくさんの降るような星の下にいると、思わず自分の存在、あちこちで鳴いている鳥ですとかかえりがたくさん鳴いていますし、今だったら虫が鳴いています。いろいろな息吹きを感じながら、自分と一緒にその中で生きていく、生かされているという意識になって、思わず生きていること

をありがたいと思う気持ち、生かさせてもらっている気持ちにふれたんです。

昔の人もやはりこういう空の下で夜空、私が見ているのと同じような夜空をやっぱ何年も何百年も前の方も見て、いろんなことを考えただろうし、そういえば、カントも星空の敬虔な心というのをかいていたことも思い出しました。人間の歴史の表面は移り変わるけれども、その変化の底に流れている大自然とのふれあいの中に自分の身をおいた時、人間が自然の中に生かされて、自然の営みの中ではじめて、小さな一人の、一個の存在として認められているような気持ちを私は味わったわけです。

そういう動揺の激しい時に変わらないもの、自分の心に意識しでなしに無意識的に出てくるような感動みたいなもの、情緒というか中から出てくるような、感情の高まりみたいなものが、生きものとして時代をこえて変わらない。もしこれが麻痺してしまったら、生きものとしての自分というものを自分で確認できなくなるかもしれない。そういうふうなものをなんとなく感じるわけですね。時代をこえて変わらない、表面はいくら変わっても変わらないものをつかみながら考えますと、進歩とはなんだろう、変化していくことが即ち進歩なのだろうかというふうな疑問に対し

て、一つは必ずしも進歩とはいえない問題がたくさんあるのではないかと思われるのです。人間というのは、昔から進歩してきたのだらうかという疑問がもう一つ深まってきます。技術というのもその技術を生み出している精神とが一つに融合して、全体として統一された姿として美を生み出しているのであって、決してちやちやなものでないのです。そして日本最古の木造建築である法隆寺なんかもその美しさは見事で、力学的にいっても理にかなっているからあれだけ長く命を保っているわけなんです。そういう意味では技術革新といっても、昔は技術のレベルが低かった、今の方が技術が進んだんだと一概に、そう言い切ってしまうこととできないのではないか。そういう技術というものは、私たちの生活の中で、人間と技術とのふれ合い、人間と技術のかかわりあいという関係から見れば、生活の中にあつた技術というものに関心がいきますし、そういう技術が進んだといっていますけれど、進んだ側面がどういふ側面なのか、確かに、昔も非常に高度な技術があつたといふことはいろいろな面から私たちは認めなければならぬのではないかと思ひます。

何が進歩なのかといふことは、まだまだ結論を出せないし、知識爆発時代に強調されるような形で人類の進歩といふものを謳歌するということには、まだまだ私には抵抗があつて、進歩とは考

えられない側面がたくさんあると思つております。

〈情緒の発達〉

それを考えさせられる材料の一つとして、さっきも情緒のことを申しましたが、私が保育科に参りました時に発達の遅れた子どもたちの幼稚園に参加させていただきまして、ここでいろいろな子どもたちに会いました。知恵の遅れている子どももあるし、足の不自由な子どももありましたし、一見どこも悪くないようだけれど、言葉がでないお子さんもありましたし、いろいろでした。その中で「一番重症なのは、情緒障害である」と思つたのですが、その仮説を、今でももっているのです。

たとえば、まなざしがあつたら思わずにこつと笑うといふことは、赤ちゃんが二か月から二か月半の間には出て来て、それが一つの社会的な笑いとして気持ちの交流につながり、次のかかわりが生まれてくるわけですが、情緒障害児の場合、ごく初期にあらわれるまなざしをかわして人間と人間の存在を確認し合うとか、また折り紙でつるを折れるようになった時、折りがつたよろこび、うれしさといふものが、なかなか出てこない。いっちゃんといふ子の例なんです、絵の具が出してある場面で、その子はあ

たり構わずぬってしまうのですが、たまたまもっていたのが赤と白で、重ねてぬったので、きれいな桃色がでたんですね。そしてらまわりの子どもたちが「いっちゃん、きれいな色が出たな」と驚いて集まってきたのですが、本人の方は表情一つ変わらなくて、パッと次の瞬間筆をおいて行ってしまう。偶然にできたことの技術に皆が驚きを示しているのに、その雰囲気の中で喜びや驚きを伝えることができなくてつらい思いをしました。

情緒障害がない子どもは、知恵が遅れていてなかなかはさみがもてない子どもでも、やりたがっている時に手をそえてやって、ほんのちょっと切れただけでもこつとする。うれしさを表わしている。一緒に喜び合う。その時の喜びの伝え合い、その感じ合い、その中からその子どもの成長が私たちに感じとれるし、次への意欲となることを信じていることができるわけです。

モンテッソリーの教具に大ききの順番に並べるのがありますけれど、能力的にはかなり高い、さっきのいっちゃんという子どもだったら、さっさと並べてしまうんですね。けれども並べたものをながめたり、できたというのを、「大きいのも小さいのもしろいろあるね」「きれいに並べたね」と表情や言葉で関心を示してくれない。情緒障害児でもごく初期からつき合った場合は、確かに固さは少なくなり、気持ちのつながりをもつことができたと

とももちろんありましたけれど、今言いたいっちゃんは五年生で、相当学校でもやっているし、しゃべるようになりましたが、やはり言葉の抑揚は全然ないわけで、棒のような調子で、「今日何があったの」とお母さんからきかれると、機械的にいつも言わねばならないことだけちゃんと言うというふうなのです。それ以上、つらかったこともあり、うれしかったことも、先生からみればあるわけですが、それは、出てこない。しかし今日あったことは順番みたいな形でいえるわけです。

また別の例で、ろう児のことにもたずさわっているわけですが、ろう児の場合は、耳が聞こえないから言語の自然修得ができないという条件があるわけで、早くから言語指導を中心とした幼児教育が行なわれているわけですが、そこで一番の問題点は、名詞が一番教えやすい。これなんかはカードで教えることができるから、名詞は早くからたくさん教えることができるわけです。いろいろ教えていって覚えさせるという考え方ですから。その次に動詞もいいわけです。助詞、助動詞は難しいわけですが、それよりも何よりも一番難しいのは、感情表現の言葉なんです。中学生になつて、小学校四年生の教科書を国語では使っていますけれど、報告文とか報道文なんかは教えやすいとおっしゃるんですね。感情表現をあらわす言葉が、なんとしても難しいと。

そんなにも早期指導をしているにもかかわらず、なぜそれが育たないのか。つらつら考えてみると、小さい時に子どもが、どういふ情況の中で言語を発見してきているか。言語修得の過程で普通の子どもは言葉を機械的に覚えていくばかりでなく、言葉を発見していくわけですが、言葉を自分のおかれた情況の中で、たとえは感情であれば、自分の中にその感情がおこっている時にそれ的確な言葉がかけられなければ言葉は覚えられないわけですね。書いてあるのを見て、困っているのを見て、泣いているのを見て、悲しいというのをいくら教えても、悲しいという気持ちにふさがっている時でなければ、自分の悲しさというものがどういふものか、「悲しい」と「さびしい」のちがいと、その微妙なところではわからないわけです。日本語は特に情緒的なんですけれども……。子どもが特にうれしいなと思っていないのに機械的にうれしいなというふうに指導されていると、子どもたちは心からうれしいなと思う気持ちの高まりができる場面がなくて、流されていることが多い。それはヘレン・ケラーを指導されていたサリヴァン女史の、指導過程とかそういう意味での考え方をかいてある書物の中でも、はっきりと指導の中でなぜ、それが難しいのかという疑問が指摘されているし、サリヴァン女史は、やはりその辺が今、どういふ情況にいて子どもの中にどんな気持ちがおこっ

ているか、相手の状態に応じて、一番びったりとした感情を表わす抽象的なことばをかけてあげる、話してあげるといふ形で、子どもたちの世界を学びとるといっています。

機械的というか、ある一方的な計画で子どもに教えることは、名詞はできるけれども抽象語の場合は難しいわけです。

感情、情緒というものは、その人その人の内面に深く根ざして外の世界とかかわりあうもので、出会いの中で、長いこと同じ状態が続くのではなくて、瞬間的に感じ、ぼやけてくるもので。うつろいやすいものもあり、だからどうでもいいかというところ、具体的な次の意欲になったり、感情表現になったりする大切なものであるだけに、簡単にある一方的な計画で教えることができないという難しさがあるわけです。

感情、情緒の問題を考えると、昔の、科学技術のまだあまり発達していなかった時代でも、感じていたことは同じではないか、赤ちゃんは同じように笑っていたでしょう、恋しいという感情は時代を超えて人間の歴史が綿々と続いている中でずっと変わらさず流れている、人間が人間であることの証しであるような人間らしさが生かされていると思うのです。非常に大切なものであるし、それを枯らしてしまうような方向にも新しい時代の激しい変

化や技術の革新が向かっているなら、そして情緒の共感とか交流とか、共に喜ぶという余裕を与えないとすれば、それは、進歩という概念とは逆ではないかと思えます。

そういう生活の中で子どもたちとふれ合いながら感じることは、それが正常だと思われる子どもたちの教育課程の中で、幼児であろうと少年であろうと高校生であろうと自分自身がむずかしい困難な課題にぶつかって、それをのり越えて解決した喜びとか、苦しんで、ようやく突破口を見つけて自分が一歩前進したと感じた時の感激とか、そういうものを大事にするような教育課程が生活の中に、教育の中に、学校の中にどれだけあるのだろうか。とにかく、これをしてあれをやってということに追われているような生活の中で、ゆっくりと自分が問題に取り組む、プロセスを大事にする、自分の課題に自分が挑戦するような自覚的な経験がどれだけ大事にされているのだろうかというのが、教育のことを考える時にいつもひっかかるわけです。

〈自然との調和〉

私自身、日常的な問題として感じていることですが、子どもの内なる自然との調和ということ言葉を使ったり、自然の中

で生きる人間、自然の中で生かされている人間と感じるわけですが、しかし、自然と人間とのかかわり方というのは、一体どういうあり方が最も調和したあり方だろうかということ、言葉では一言でかいてしまいますけれど、いつも思うのです。子どもの自然的、自制的成長の調和というものは、どの点で、どんな形でみつけ出すことができるかということを考えるにつけても、人間一般の問題として、人間と自然とのかかわり方というのを改めていろいろな角度からながめてみながら、もう一べん、子どもの問題に戻ったりしてみます。

生物としての人間の適応能力は、他の動物に比べるならうんと乏しいのです。他の動物なら寒さ、暑さに対する生まれつきもっている適応の能力があるから、新しい技術を開発する必要がなかったわけですけれど、人間の場合には、寒さに対する自然的な自分自身のもっている遺伝的な適応能力がないわけで、自然に対決して自然の中で生きていくには、寒い地方なら寒い地方に合わせて、自分の着るべきものを技術的に工夫してつくり出していかなければならなかったし、あるいは、雨、風、寒さを防ぐ住まいとして、山間部の雨の多いところだったら傾斜の激しい屋根にし、海岸のような風のきついところだったら屋根の造りに特徴がある

し、その地域の自然の状態に合わせてせいっぱいの工夫をして、自分を自然の状態の中で生かしていくように自分の有り様をかえていく。というのは、適応能力が低いからこそそういうあり方をしてきたのだと思います。

一方自然のあり方そのものを変えられる場合もあります。今言いましたような、暑さとか寒さとか、雨とか風とか、夜とか朝とかいうものは、人間の力でどうしてもかえることができないもので、それに関しては自分の方を変える能力を編み出していくのですが、自然の有り様そのものに手を加えることができる場合には、たとえば自分の食料として食べるのに適した植物だけを集中的に栽培して、他のものをぬいて、自分の生存を確保するために自然の有り様を変えるという技術をつくり出しました。そのように人間は自分の有り様を変える方法と自然の有り様を変える方法と、二通りの形で技術を開発していったのです。それらのバランスをとりながら生み出してきたのが、人間の自然に対する適応という状態だったのではないのでしょうか。そういうような状態から今の姿を見ますと、どちらの方向への技術の開発も必要だったわけですが、現在の姿を見ますと、これは、自然の有り様に手を加えて人間の生存に都合のいいように変えていくという方面の技術が、非常に拡大するというか、肥大する。そちらの方が強く前面

に出て、自然の状態に人間の有り様を合わせながらということ、かなりひずんできたのではないかと思います。

最近だと、大阪の町中でみられるのと同じようなタイプの家が、山間部でも、海岸地方でも見られるというふうに、だんだん変わってきました。それを促しているのが、産業の工業化の前進というか、工業を非常に進めることによってどんどん同じ製品が出回ってきたことだと思います。これはほんの一例ですが、片方は前に出てきたけれど、片方はどちらかという後退する形になってバランスがくずれてきた。自然の状態の中で生かしていくように自分の有り様をかえていく方向が欠けているのではないかと、このごろの世の中の状態をみると感じるわけです。

私は植物を育てるのが好きで、いろいろな花を育てています。植えかえてまだ根が十分につかない間に、前の余力で、大変見事に花をいっぱいつけるんですが、次の年は、自分でつけたつぼみでありながら、咲かせることができないで茶色に枯らして落としてしまう。ああ、枯れてしまうのかなと思うと、一年間、じっくり休む時間をとったみたいで、次の年になるとまた息を吹き返して、また今年も、——私は椿が好きなんですけれども——見事にたくさんつぼみをつけている、昨年のおのみすぼらしい姿はなんだったのかなと思う位に——。自分の根がすっかり大地につ

くまでの間に花をたくさんつけてしまうと、根を弱らせてしまうわけですね。だから自分で調節してたくさんつぼみを枯らして、枯れ枝をつくって、じっと忍耐の年を過ごしたんだと、とてもいとおしく思うんです。生き生とした葉になり、大きなつぼみをいっぱいつけてくると、自分の中で根のはり方と花のつけ方のバランス、自分のエネルギーをどう使えるかというバランスをとりながら、自己調整の力みたいなのがみえるのです。

私たちも自然の生き物なのです。生き物の営みを考える時に、その基本的な性質は、全体としてのバランスをとりながら自然に自己調整をしていく力があるということ、そう考えると、せっばつまって追いつめられたような形にならないで、子どもをじつとゆとりを持って見ていくことができるような気がするのです。自分はやせつかちなちなものですから、そんなことを自分に言いきかせるようにしているわけです。

人間の歴史の営みの中で、受け継がれている永遠に変わらない心の働きとか、それから人間が生き物としてのかかわりの中で生み出された自律というものとかがあるので、そのバランスをとりながら歩くということが、人間と自然との適応という姿ではないかと思うのです。

(幼児教育現職研究会講演より)

お茶の水女子大学幼児教育現職研究会のお知らせ

幼児教育の現職者が保育の原理を研究するための定期研究会を開く予定です。希望の方は左の要項で申し込んで下さい。

- 一、昭和五十二年四月より、週一回、定期的に開催する。
- 一、お茶の水女子大学の教官が担当する。
- 一、午後六時～八時とし、一年間継続する。
- 一、定員 六十名
- 一、資格 幼児保育の現職経験のある者、短卒またはそれに準ずる者、一年間継続可能な者。
- 一、規則書ご希望の方は左のようにお申し込み下さい。

東京都文京区大塚二―一―一 (〒112)

お茶の水女子大学家政学部児童学科内

幼児教育研究室 現職研究会宛

氏名、生年月日、住所、現職を記し、五十円切手を同封して封書で申し込むこと。